

令和3年度学校評価（自己評価書）

樟南高等学校

1 はじめに

少子高齢化が急速に進行する社会において、中学生やその保護者から通いたい・通わせたい学校として選ばれるには、学校の特色をどのように構築するかが急務である。過去13年間の評価を踏まえ、今年度は、「より特色のある学校づくり」という観点から、教育活動の成果や課題を明確化していきたい。

2 実施方法

今年度も引き続き、各部・学科・コース毎に年度当初に設定した評価項目について、それぞれの構成員が評価した。

評価者は管理職を除く本務職員91名。

3 実施期間

令和4年2月22日～3月10日

4 評価方法

(1) 評価の尺度：評価項目を5段階で評価する。

5： かなり成果が上がっている。計画・実践ともよい。望ましい状況である。

4： 一歩前進している。ややよい。よい方向に進んでいる。

3： 普通である。

2： 努力を要する。問題点がある。一歩後退した。

1： まったくできていない。

(2) 所見

よかった点や来年度の課題等を記述する。

5 結果報告

評価項目	評価者	評価結果	
		今年度	昨年度
校務分掌等の組織運営の改善	教務部	4	3
挨拶や服装等のマナーアップ	生徒指導部	4	4
個々の生徒理解と適切な支援	教育相談別室支援	4	4
生徒の能力・適性に応じた進路指導	進路指導部	4	4
難関大学への挑戦	特別進学指導部	3	3
募集定員確保のための組織運営	広報部	4	3
健康と安全の推進	保健部	4	4
トイレ、階段、特別清掃区域の清掃の徹底	環境整備部	3	4
図書館の利用促進～貸し出し本の増加	図書館部	3	3
窓口での接客対応の充実	事務部	4	4
上級資格への挑戦	商業科	4	4
基本的な生活習慣の確立	〃		
挨拶・服装指導の徹底	文理コース	3	4
積極的に授業に参加する態度の育成	英数コース	4	4
豊かな人間性の育成	未来創造コース	3	3
授業への集中力の養成	〃		
各種検定試験と資格取得への挑戦	機械工学コース	4	4
資格取得、検定試験への指導の充実	電気工学コース	3	3
三級整備士全員合格への挑戦	自動車工学コース	5	4
	平均	3.7	3.6

評価の尺度

- 5： かなり成果が上がっている。計画・実践ともよい。望ましい状況である。
- 4： 一歩前進している。ややよい。よい方向に進んでいる。
- 3： 普通である。
- 2： 努力を要する。問題点がある。一歩後退した。
- 1： まったくできていない。

6 自己評価の総括

() 昨年度の評価

(1) 校務分掌等の組織運営の改善（教務部） 評価4（3）

新型コロナウイルスの影響で昨年に引き続き、行事の変更や中止などを余儀なくされたが、Zoom を活用した遠隔送信で様々な行事を遂行できた。校務分掌の運営効率化を図るため、教務システムを導入して4年目となった。まだ改善する部分はあるが、業務改善による電子化を進めているので改善は図れている、今後も多くの研修を実施して、職員のスキルアップにつなげたい。

また、タブレットによる諸会議のペーパーレス化が2年目となり、かなり浸透してきた。来年度は、新入生は一人1台タブレット端末を所有することから、職員の情報機器活用が急務であり、各教科で研修を重ねている。

来年度から新学習指導要領の年次進行が始まる。高校でも観点別評価が実施されるので、職員への評価方法や変更点など研修を重ね、生徒・保護者が、より理解しやすい評価を目指していきたい。

(2) 挨拶や服装等のマナーアップ（生徒指導部） 評価4（4）

今年度は、登校指導や下校指導などにより挨拶がよくなってきた。昨年度に引き続き、コロナ対策の一環として冬場の防寒着の着用を認めていたけれども、服装等の大きな乱れを感じることは少なかった。自転車の運転や歩行状況については、どちらも「イヤホンの装着」や「ながらスマホ」がみられ、これからの指導が必要である。交通安全教室等を利用し、交通ルールの遵守・マナー向上を図りたい。また、SNS等の利用についても保護者との連携を図り、情報モラル教育に努めていきたい。

(3) 個々の生徒理解と適切な支援（教育相談別室支援） 評価4（4）

本年度適応推進委員会で認定された生徒は、3年7名、2年8名、1年8名の23名（昨年度14名）で増加傾向にある。該当する生徒への対応、管理体制については整えられてきつつあるが、生徒の多様化と増加傾向に対応する支援係の人数が不足気味である。現時点においては、教室復帰2名、転学1名、休学1名であった。

今後の問題点として、学力支援については、条件をぎりぎり満たして進級するというケースが多いけれども、生徒の心の負担を考えると強い指導が難しい場合もあり、適切な支援の在り方の研修が求められる。また、担任の積極的な関わりと教科担任・支援係との連携を更に密にすることが重要である。

(4) 生徒の能力・適性に応じた進路指導（進路指導部） 評価4（4）

本年度の求人数は1,963名（県内企業から540名）求人倍率は26.5倍（前年17.8倍）で昨年より3学年の人数が減ったため倍率は上昇した。求人数も10

%程増加し、売り手市場が続いている。就職者は73名で、学校の紹介により69名、公務員2名（鹿児島市役所1名、自衛官1名）、縁故2名で99%の内定率だった。各コース主任、担任を中心とした生徒の能力や適性を見極め、丁寧な進路指導を進めることができた。県外希望者が35名、県内38名となっている。県内希望が52%で昨年より県外が増えた。来年度も人手不足は続くと思われるが、新型コロナウイルスや経済状況、世界状況など不透明な部分もあり早めの取り組みを実施していきたい。

進学については、文理・英数を除き、国公立大学2名、私立大学50名、県立短期大学1名、私立短期大学11名、専門学校66名と概ね良好であった。一方、AO入試で不合格となった者もあり、進路希望実現のための学力向上対策が必要である。

(5) 難関大学への挑戦（特別進学指導部） 評価3（3）

昨年度以上に新型コロナウイルス感染症の影響が色濃く出た大学受験となった。学校の授業に欠席することなく参加しづらい状況が生まれたりして、自学自習がきちんとできる生徒とそうでない生徒の間に差ができてしまった。

進路に関しては、共通テストの難化により上位校へのチャレンジ者数を増やすことができなかった。

(6) 募集定員確保のための組織運営（広報部） 評価4（3）

今年度も学校見学・体験入学・私学フェアなど新型コロナウイルスの影響で中止が相次いだ。が、「テレビCM」や「テレビ番組の放送」、「夜の個別相談会」などを新たに実施した。不安な広報活動であったものの、昨年度を上回る受検者数となった。この増加については、中学3年生の増加、コロナの影響での複数校受検の増加、他校の広報活動状況の影響などが要因と思われる。来年度も入試会場を増やす分散型を踏襲し、Webによる出願方法の採用を視野に入試業務の効率化を図りたい。

(7) 健康と安全の推進（保健部） 評価4（4）

健康面においては、新型コロナウイルス感染対策を重点に活動した1年であった。

令和2年度より、新型コロナウイルス対策委員会を必要に応じて30回開催した。全国各地で急速なコロナ感染拡大により緊急事態宣言・蔓延防止処置が発令され、学校運営（行事・授業・朝補習・部活動・寮生活等）に関する自粛や制限を余儀なくされる中、生徒・保護者・教職員の協力で、集団感染（クラスター）や学校・学級閉鎖・寮閉鎖など大きな問題もなく、今年度が終われることに感謝したい。

換気・手指消毒・マスク着用・黙食等の「新しい生活様式の実践」が徹底された成果だと思う。サーマルカメラ「保健室・東雲寮・武岡寮・女子寮」や二酸化炭素濃度計・サーキュレーターなど積極的に設置して頂き、環境面での改善が図れた。

また、生徒に、新型コロナウイルス感染症に関する講座「かがやきスクール」をZoomで配信

して個々のコロナ感染予防の意識が高まった。

1 1 月には鹿児島市学校保健会学校保健研究協議会を本校で開催し、本校教職員の協力を得て無事終えることができた。

生徒の身体測定については、業者委託したことで実施日を3日から2日へ短縮できた。健康診断については、学級ごとにリレー方式で行い、【3蜜】を避け新型コロナウイルス感染予防対策も徹底できた。来年度も、「新しい生活様式の実践」を基に、保護者の協力を得ながら、今年度以上に予防対策を徹底したい。

健康診断については、検尿・心臓検診が長期欠席等で全生徒の期日内実施が達成できなかったため保護者と連携を取りながら、期日内に全生徒が実施できるよう改善に努めたい。

生徒の健康面については、2学期以降、不登校傾向「別室・保健室登校」の生徒が急増したため、カウンセリング希望者も急増した。特に、進学系の文理・英数コースの生徒や保護者の相談が急増している状況である。新型コロナウイルス感染症拡大も1つの要因として考えられる。

1年生を対象に20年継続してきた「救急法・心肺蘇生法」講習会が、新型コロナウイルス感染拡大のため実施できなかった。来年度、1・2年生を対象に計画したい。

安全面については、安全点検を毎月行い、危険場所や施設等の改修工事や修繕等迅速に対応して、けが等の予防につながった。今後も、危険箇所や施設等の修繕箇所等を確実に把握し、迅速に対応したい。特に、体育施設等の改修工事や修繕等を計画的に実施したい。

(8) トイレ、階段、特別清掃区域の清掃の徹底（環境整備部） 評価3（4）

「トイレのきれいな学校づくり」をモットーに、保健室の先生方の協力のもと、昨年と同様にトイレの清掃点検活動に取り組み、トイレをきれいに維持できた。

ゴミステーションでの分別がなかなか難しい状況である。家庭ごみの処分方法ではなく、事業所ごみ扱いで処分をしなければならないので、ごみの分別や捨て方については事業所ごみ処理の仕方での指導や共通理解を図る必要がある。特に、部活動や職員室のごみの分別が指摘されている。職員による主導が求められる。

(9) 図書館の利用促進～貸し出し本の増加（図書館） 評価3（3）

コロナの影響で利用制限があったものの、保健部に、アクリル板の一部導入や入口に手指消毒スタンドを設置してもらったので、コロナ対策を取りながら開館できた。

朝読書週間の定着により、貸し出しも多くなっている。休み時間の利用も多いので、今後も生徒が来館しやすい図書館を目指したい。

(10) 窓口での接客対応の充実（事務部） 評価4（4）

事務室の窓口業務は、本校を訪れる来訪者が一番最初に本校の職員に接する場所であり、来訪者の本校に対する印象を決めることになる事務室にとって最も大切な業務の一つである。職員の対応は全員丁寧で適切な対応であった。コロナ感染症拡大もあり来校者の対応に少し滞りが見られた点が今後の改善点である。

また、来訪者への対応と同様に生徒・保護者・職員への対応も、事務室の大切な窓口業務である。前年度から、朝夕の窓口の開放時間を拡大し、生徒には随時対応するようにした。事務室全体として窓口の接客対応は、昨年度より一歩前進し、やや良い方向に進んでいると評価している。来年度も、来校者・生徒・保護者への対応の充実が一層図れるよう職員の共通理解に努めたい。

(11) 上級資格への挑戦・基本的な生活習慣の徹底（商業科） 評価4（4）

上級資格への挑戦については、先生方の情熱と生徒の頑張りで成果を挙げられた。全商各種検定をはじめ、日商簿記2級や秘書実務検定2級、実用英語検定2級などの上級の資格に挑戦し、合格したことは評価できる。特に難易度の高い全商英語検定1級を1年生で取得した生徒もいた。また、1年では、商業経済検定の複数科目合格や全商電卓検定1級も多数合格した。2年では、全商簿記検定1級や、ビジネス文書実務検定1級の合格者を多数出すとともに、選択で「医療事務」に取り組み、多数合格した。3年には、「日本情報処理検定協会」主催の検定、全種目（8種目）1級合格者も出た。これらの資格を生かし、国公立の山口大学や名桜大学にも合格している。

基本的な生活習慣の徹底については、ほとんどの生徒は、挨拶や服装もしっかりしており、学校生活も落ち着いて行動できている。授業態度も良好でひた向きに学習に取り組んできた。しかし、一部の生徒が欠席遅刻や服装の乱れで指導を受けている。教員側も、生徒とのコミュニケーションをしっかりと取りつつ、根気強く指導を継続し、自身でしっかりと考え行動できる生徒育成に励みたい。

基礎学力に乏しい生徒もいることから授業内容を理解していない生徒もいるので、支援的な取り組みが必要である。また、心因性の病気が原因で通常学級での生活が困難な生徒が増えてきているのも課題である。

(12) 挨拶・服装指導の徹底（文理コース） 評価3（4）

生活面の指導の強化を学力向上に繋げようと努力を続けている。服装面では、男子の一部できちんと整髪されていない生徒が散見される。換気促進に伴い、冬制服の上に暖房着が認められたので、どこまでが合格ラインなのか指導しづらかった。

挨拶の面では、大きな声で挨拶と言にくい状況ではあるが、授業の始まりの礼が不十分であったり、教科担任以外の先生への会釈、黙礼の意識が薄い生徒が見受けられた。教員側からも積極的に挨拶を行い、次年度も引き続き指導を継続していきたい。

(13) 積極的に授業に参加する態度の育成（英数コース） 評価4（4）

昨年度に引き続き、コロナ禍における授業展開に苦慮する面があった。特に、生徒同士が協力しながら活動する場面を多く確保できなかったことは残念であった。

しかし、ICT機器を活用することで、情報共有をこれまで以上に図ることや生徒の理解度を深める試みなどが実践され、新たな授業の在り方を模索できた。デジタル教科書の活用やその他のデジタルコンテンツを用いることで、より効果的に生徒の視覚に訴えることのできる授業が増えつつあることや、生徒一人一人が各自でタブレット端末（iPad等）を操作し参加する授業は、生徒の積極性を引き出す良いきっかけとなっており、今後もその可能性を追求していきたい。また、学習形態の工夫に取り組み、生徒の興味・関心を喚起する授業も行われ、単語力や漢字力テスト、その他の小テストで結果を上げることができた。授業に臨む姿勢作り（教材準備・チャイム着席他）や予習・復習・提出物に対する見届け指導、授業における教師の丁寧な説明や発問の活用などの基本的事項は、今後も継続し、生徒の積極性向上につなげたい。

昨年度末に挙げた諸課題については、学級担任の主導により少しずつ改善されている。しかし、不登校傾向にある生徒への指導・支援は、今年度も課題として残った。学校生活における様々な「当たり前」を指導していく中、生徒を取り巻く環境が多様化している状況下で、求められている指導について改めて考えていく必要がある。

(14) 豊かな人間性の育成・授業への集中力の養成（未来創造コース） 評価3（3）

「豊かな人間性の育成」については、コース全体としては、落ち着いて学校生活を送っているという意見が多かったものの、携帯電話の不正使用違反が例年より多かったので、指導に工夫が必要である。進路意識構築のための未来塾には、前学園長と外部講師2名を招き行った。生徒たちからの評判も高く、新年度は回数を増やせるように取り組んでいきたい。課題としては、講演ではZoomを活用しているが、直接話を聞く場合と、画面越しで話を聞く場合では聞き手側の受け取り方に少し差があると感じたので、もっと工夫できないかコース内で話し合いをしていきたい。

「授業への集中力の養成」にはいろいろな意見が出されている。クラス内での理解度の差が大きく、授業での照準を立てにくいという意見もあり、クラス編成をする際の課題としたい。また、毎年、毎年の課題として部活動生の居眠りがあるので、来年度は部活動生を集めての集会等を企画していきたい。

(15) 各種検定試験と資格取得への挑戦（機械工学コース） 評価4（4）

目標としている全国工業高校ジュニアマイスター顕彰制度において、昨年度と比較すると、「ゴールド」1名が2名、「シルバー」0名が7名、「ブロンズ」7名が3名と計12名の生徒が認定され好結果となった。今までになく3年生が進路決定後も上級資格にチャレンジしたことも一つの理由として考えられる。

反省点としては、機械工学コースの一つの目標である危険物取扱者試験乙種4類の合格率が非常に低く、全類取得する生徒がいなかった事である。特訓時間の不足も考えられるが、来年度の課題としたい。また、1学年次より、資格取得への意欲を持たせ、学年が進むにつれ上級資格へ挑戦するという流れが醸成されるよう期待したい。

(16) 資格取得、検定試験への指導の充実（電気工学コース） 評価3（3）

全国工業高校ジュニアマイスターにおいて、3年生が「ゴールド」1名（特別賞も受賞）、「シルバー」を6名、「ブロンズ」を6名の延べ13名が取得し、クラスの半分以上が認定を受けて卒業した。一方で、2年生の認定者がいなかった。第二種電気工事士は13名（3年3名、2年4名、他コース6名）の合格者であった。昨年度から取り組み始めた技能検定（電子機器組立て）も新たに4名が合格した。

電気工学コースは資格取得の意欲や積極的な姿勢を示す生徒が多い。しかし、一部の生徒は部活や家庭を理由に消極的である。資格取得のための指導に磨きをかけながら、事情のある生徒でも資格取得に集中できる環境づくりに心がけ、資格の受験者数増と合格率増を目指していきたい。

(17) 三級自動車整備士全員合格への挑戦（自動車工学コース） 評価5（4）

全国工業高校ジュニアマイスターにおいて、「ゴールド」を4名（特別賞2名）、「シルバー」を7名、「ブロンズ」を5名が取得し、近年最高の結果を出してくれた。

特に、三級整備士については、分散・時差登校等乗り越え自動車工学コース初となる、全員養成・全員受験・全員合格を成し遂げてくれた生徒たちを誇りに思う。それと同時に様々な計画の変更を余儀なくされながらも、課題の作成や補習など粘り強く指導を続けた担任やコース職員の努力の成果である。

今後さらに進化できるようコース職員一同、研鑽に努めたい。

7 まとめ

本年度の教育目標には、以下の5点が掲げられている。

- (1) 建学の精神「博文約礼」と、校訓「進取 友愛 誠実」の具現化を図る学校づくりに努める。
- (2) 「私学の教職員」であることを強く意識し、一人一人の生徒を大切にし保護者の期待に応える信頼される教職員により、豊かな発想に基づく創造性に富んだ学校づくりに取り組む。
- (3) 充実した授業実践により、確かな学力の定着を図り、生徒の進路希望実現を支援する。
- (4) 学校の「不易流行」を熟慮し、バランスの取れた学校改革に取り組む。
- (5) 一人一人の生徒や保護者に向き合う特別支援教育を推進する。

さらに、教育目標を実現するための努力目標を次の8点定め、本年度の教育の指針とした。①特色のある学校づくり ②授業の充実と学力の定着 ③高いレベルで文武両道に取り組む生徒の育成 ④確固たる目標を持って上級学校や職場への進路希望実現を目指す生徒への積極的支援 ⑤基本的な生活習慣の確立と心身共に健康な生徒の育成 ⑥教育環境の整備と美化 ⑦創意工夫のある広報活動の展開 ⑧新たな時代の学校改革の推進

この8点の観点により、本年度の教育活動の総括をしたい。

努力目標の①は「特色のある学校づくり」である。生徒指導部が挨拶・服装のマナーアップを目標に掲げ、普通科の各コースや商業科で豊かな人間性の育成や挨拶・服装指導の徹底等に取り組んできた。ほとんどの生徒の基本的な生活習慣は確立されているが、一部に服装や頭髪で注意を受ける者がある。部活動生に始まった「立ち止まっていたの挨拶」は、部員以外にも広まっている。挨拶に限らず、文武両道を機軸にしている部活動生全員が、人間力強化につながる事柄についてリーダーシップを発揮し、特色ある校風の醸成に貢献してほしい。これが本校への入学希望者の増加に直結する主要因の一つであることを再認識させるよう、教師はたゆまぬ声かけに努めたい。

特別支援教育については、「個々の生徒理解と適切な支援」を項目に挙げ、教育相談係を中心に取り組んできた。クオリティルームでのきめ細かな指導に頼るところではあるが、認定者が増加しているので、いかにして生徒の目的意識を醸成するか更なる工夫が求められる。それが教室復帰へのポイントになるので、係と担任や教科担任との緊密な連携や生徒とのより深いかかわりが不可欠になる。

未来創造コースでの新聞活用を始め、スキットコンテストや中国・韓国を学ぶ国際文化理解などの様々な取り組みは本校教育の特色の一つと言える。今年度も、コロナ禍により、職場体験を始め、スキットコンテストなどコースを代表する行事が開催できず残念であったが、未来塾はオンラインで開催できたので今後も拡充したい。

世の中のニーズに対応する豊かな人間性の育成に資するために、コロナ禍で中断を余儀なくされている、平成元年に始まったボランティア活動を始め、商業科の「樟南マルシェ」や工業科のプランター置台設置などの地域貢献活動とともに、未来創造コース独自の取り組みの更なる充実に期待したい。

②の「授業の充実と学力の定着」については、英数コースが「積極的に授業に参加する態度の育成」を目標に、アクティブラーニングなど協働の場の構築を図ったが、コロナ禍の影響で確保できなかった。しかし、ICT 機器やデジタルコンテンツの活用が興味・関心を喚起する要因になっているので、今後もこれらを授業取り組みの積極性向上に繋げたい。また、未来創造コースが「授業への集中力の養成」を評価項目に挙げているが、理解力の差に苦慮している。視聴覚教材を活用するなどして生徒の意

欲を向上させることが集中力の養成には不可欠であり、意欲の向上には目標設定が重要である。コース全体として生徒の目標実現に資する具体策の構築が急務である。

③の「高いレベルで文武両道に取り組む生徒の育成」については、進路指導部が「生徒の能力・適正に応じた進路指導」を、特別進学指導部が「難関大学への挑戦」をそれぞれ評価項目に掲げた。就職については、学校への求人票により69名、公務員2名、縁故2名で99%の内定率だった。ただ、コロナ禍の影響により業績不振が報道されている中でも、求人数は増加している。今後の社会情勢を見据え、求人状況を把握しての対応が求められる。進学については、文理・英数を除き、国公立大学2名、私立大学50名、県立短期大学1名、私立短期大学11名、専門学校66名と良い結果を挙げた。

特別進学部については、文理コースに於いては、筑波大・九州大・鹿児島大医学部医学科など難関大への合格者を出すことができた。英数コースでは、横浜国立大学の合格者をはじめ、国公立大に26名合格したが、文理コースも含め、医・歯・薬系の希望者が増えているようだ。志望と学力のギャップに苦悩を強いられた者も少なくないので、志望する進路の早期設定と、その実現に資する志望大学の難易度を掌握し、バランスのとれた基礎力の定着が根本であるという意識の醸成が不可欠である。また、新課程に準じた国公立大学推薦入学制度への対応策構築も急務である。

④の「確固たる目標を持って上級学校や職場への進路希望実現を目指す生徒への積極的支援」については、普通科未来創造コースや文理・英数コースで、これまで、進路指導のスペシャリストによる講演や先輩の講話を聴く機会を設け、生徒の目標設定の一助となっていたが、コロナ禍により、今年度は機会を減らさざるを得なかった。

また、未来創造コース、商業科、工業科の職場体験も中止を余儀なくされたが、進路指導部主催による、年1回の進路ガイダンスは学年別に実施できたので、生徒は具体的な説明を受け、進路の探究に資する行事となった。

商業科では、受検級の難易度別班編成により、日商簿記2級、医療事務2級や全商3種目1級などの上級資格に合格している。今年度の1年生から、新たなコース制により、国公立大への道の開拓が本格的に始まったので、担当教諭と生徒が一丸となって成果を挙げたい。

工業科においては、機械・電気・自動車の全コース合計で全国工業高校ジュニアマイスターの「ゴールド」7名（昨年4名）・「シルバー」20名（4名）・「ブロンズ」18名（14名）と大きく成果を伸ばした。進路決定後の挑戦や電子機器組み立て技能検定など新たな挑戦も要因の一つであろう。また、自動車の3級整備士国家試験合格100%達成はコース初の快挙であり大いに評価できる。

今後も、すべての科・コースにおいて、生徒に自らの将来を見据えた資格取得の重要性を自覚させ、3年間を見通した進路意識の醸成に努めるとともに、意欲不足の生徒をどのように巻き込み相乗効果を生み出すか、日頃の授業や教材を更に研究し、専

門的な知識の定着を目指して1年から段階的に指導していきたい。

⑤の「基本的な生活習慣の確立と心身共に健康な生徒の育成」については、保健部主導の日々の健康観察により健康状態の把握がなされており、感染症予防や精神的な悩みの解消も継続的努力により管理がしっかりとされている。

新型コロナウイルス感染対策のため、教室・体育施設・寮などの消毒が恒常的になされ、クラスター発生を防止できたことは評価に値する。今後も、換気・手洗い・マスク着用・黙食など「新しい生活様式」を励行させたい。

心身の不調を訴える生徒が増加傾向にあるので、保健室とクオリティールームとの連携を図り、心の健康に資するサポートの在り方の研究を深め、楽しく学べる環境づくりに努めたい。また、生徒が、自ら基本的な生活習慣を確立することにより、心身の健康の維持ができるよう努めさせたい。

⑥の「教育環境の整備と美化」については、環境整備部が目標の一つとして、「トイレのきれいな学校づくり」を掲げ、清掃点検の実施により、きれいなトイレが維持されているとの報告がなされている。ゴミステーションへのゴミの持ち込みに課題が指摘されているので、分別などについて意識の徹底が求められる。

⑦の「創意工夫のある広報活動の展開」については、広報部が「募集定員確保のための組織運営」を項目に掲げ、定員確保に努めた。ただ、コロナ対策のため、全ての行事に新たな対応が求められ、苦慮した業務もあったが、ほぼ予定通り遂行することができ、全職員の努力により、入学者の増に繋がった。来年度も同様の対応が求められるであろうから、コロナ禍に伴う諸事態を想定しながら受検者の確保に努めたい。

⑧の「新たな時代の学校改革の推進」については、創意工夫ある教育活動として地域貢献を推進してきた30年を超える特別養護老人ホームでの女子ボランティア活動は、今年もコロナ禍のため休止を余儀なくされた。地域貢献活動として定着していた「樟南マルシェ」も中止となったので来年度に期待したい。マックスバリュ武岡店への木製ベンチなどの提供や学校周辺の清掃活動を行う男子ボランティア活動などは、継続されており、地域貢献の意識醸成に資する活動として評価したい。

国際文化理解を目指した中国語・韓国語や英語に関する総合的な探究も新たな時代を見据えた教育活動であり、更なる充実した運営が望まれる。

今後、学校改革に向けた特色ある教育活動を推進するためには、「働き方改革」を踏まえた効率的な業務遂行が必然となる。その一環として、昨年度、全教職員にタブレット PC が配布され、ペーパーレス化と業務の効率化が可能になった。また、各教室に最新鋭のプロジェクタとスクリーンが設置されたことにより、一堂に会することなく各教室で、Zoom により映像による式や集会を行えるようになった。更に、Wi-Fi 機能も整備され、授業への ICT 活用推進も図れるようになっているので、これからは、「自立」する生徒の育成を目指して、ICT を駆使しつつ、創意工夫に充ちた樟南独自の教育活動を展開したい。

今、進学に係る高校教育は、「高大接続改革」を中心に大きな転換期を迎えている。従来の「大学入試センター試験」に代わり、昨年度から「大学入学共通テスト」が実施された。更に国は、未来を担う人材育成のため、高等教育をはじめとする教育の在り方について国の方向性を明確にすべく、「教育未来創造会議」を立ち上げた。

情報化社会の急速な進展や少子高齢化・グローバル化などにより、現在の中高生が社会で活躍を求められる頃には、社会は我々の想像をはるかに超えるようなものになっていることが想定できる。このような時代においては、「自ら問題を発見し、それを他と協力して解決する資質や能力が求められる」ということが、この接続改革のベースになっており、この共通テストで、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」をバランスよく評価することが求められているとされている。従って、高校生活においては、自らの力で考えをまとめたり、相手が理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を培うことを常に意識しておくことが肝要である。

新学習指導要領の総則では、全教科について、教科ごとに「何ができるようになるか」を明確化し、生徒が主体的・対話的に参加することにより、深い学びを得られるような授業に改善しなければならないとしている。そのため、教員には、生徒の思考を深めるため、発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められている。

また、ポートフォリオに代わり「キャリアパスポート」が導入され、今年度の新入生は、中学校での活動を記録した「キャリアパスポート」を携え入学してきた。高校では、生徒に年度当初の目標を設定させるとともに、それぞれの目標に沿った活動を詳細に記録させておく必要がある。従って、我々教員には、生徒たちの卒業後の進路を視野に「キャリアパスポート」を蓄積しておかねばならない。

これらを念頭に、進学希望者については、早期に目標設定をするとともに、入試改革を踏まえた各コース独自の学習法の研修を行い、教科バランスの維持を図ることが急務である。就職希望者についても、就職後に有用となる資格や技術の修得を目標に各種検定や実習への積極的な取り組みが求められる。

今後は、新学習指導要領に準拠した教育課程の編成や教育内容の新たな構築とともに、観点別評価の在り方などの研修への取り組みも重要となる。全科・コースが連携を図りながら、教育内容・方法・評価の刷新を図り、新たな総合型選抜（旧 AO 入試）を活用しての国公立を含む大学進学や公務員への道の構築も含めて、多様化する生徒・保護者のニーズに応えられる学校という評価を確立したい。そのためには、在校生が「がんばれば感動」というモットーの具現者になることが不可欠である。その実現を可能にする牽引者となるのは、教職員にほかならない。生徒により多くの感動を与え、誰もが通いたくなる名門校の創造を目指し、全職員による共通実践を継続することが肝要である。